

滑稽自慢

放言散士著

天狗の討論

愛花仙人
骨皮道人
関

盛和館

行發

091675-000-3

特12-640

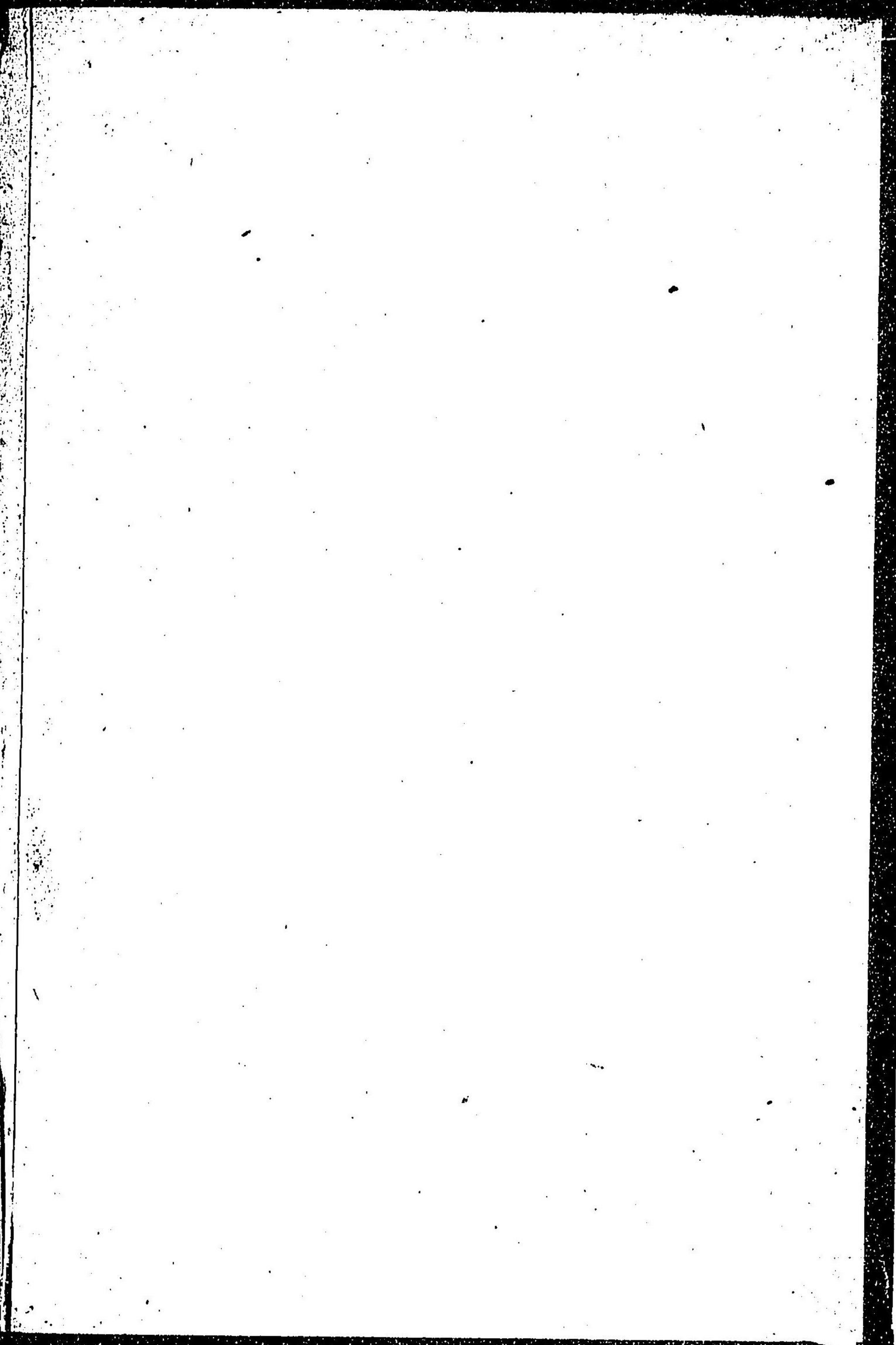
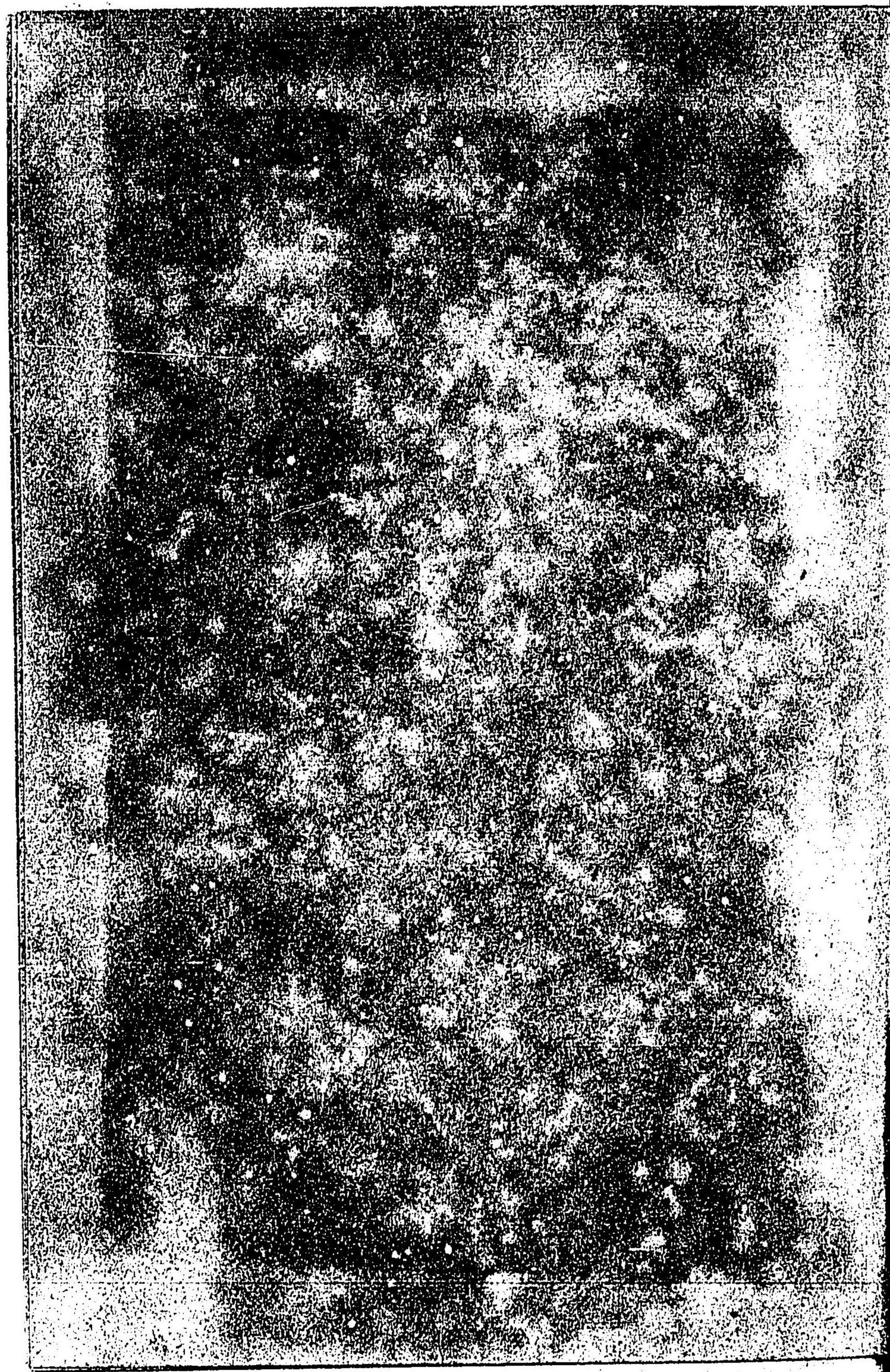
滑稽自慢天狗の討論

放言散士著

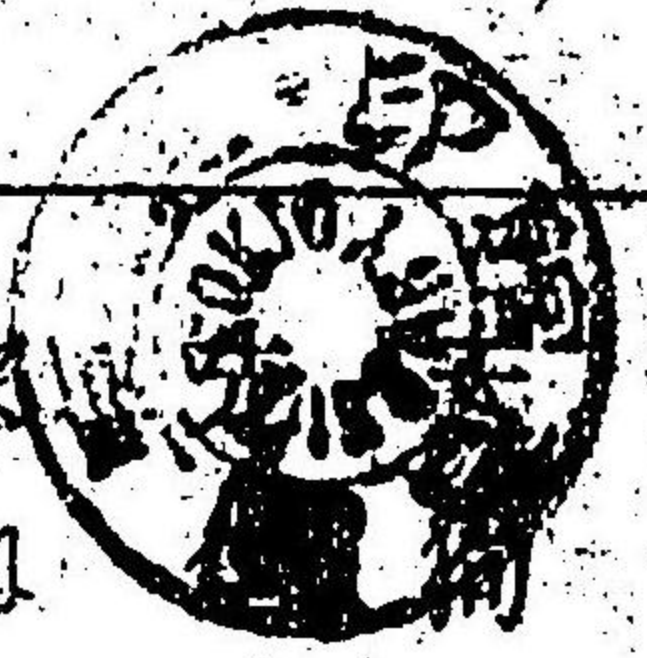
M21

DBO-0136





No 11124



の討論序
御在宅なりやと入り來り誰れと見

なま放言散士と去ふ浮世を茶ふ暮らす男なり

時候を述べ畢れ散士懐より一の草稿を出

先生願く此書の爲め一の口上を書けよと

紅夢樓主人未だ之を開かず頭を搔て日く近來

散士の情人の爲めお金を使ひ横着の爲めお身

代を凹ませた娘と聞けり左れば友人の間を勸

他口を寄附金を集む食職の建立を勉むと欲す

年なら僕も新職を成し勤め學者の勉



子たる身を以て如何下手文章なりとて勸化帳の口上を書かざるべきや其段の平は願下は致したしと云へハ散士カラ〜と笑て曰く先生の早合點も亦甚むひかな卵を見て時を報るを望むとい正は判然と先生の事を云ふなるべし先づ〜勸化帳たか勸進帳たか關所を開てデハ御座らぬ書中を開ひて御通しデモない御覽下さいと往來の一卷取り出たせば主人ナンノナシノと云ひながら手は取つて高らかにこそ讀みあげてソレつら〜おもん見るよ似山伏の

勸進帳とい思ひの外天狗の討論と題する滑稽の一書なり之を讀みかけておかしくて〜滑稽が絶倒してケツコウなる珍書なり主人腮と臍を押へて曰く此節滑稽の書類る流行と滑稽書の校閲序文を頼みよ來るもの甚た多し僕の如き眞面目の人ハ之が爲めよお臍の茶冷める暇なく腮の鉸外れ切とならんとす豈は迷惑千萬の次第ならずや僕早速製作所は注文して鏡の籙を製し以て腮よかけんとす其上よて何巻でも拜見仕るべし今日ハ迎もお仕舞まで讀む



ことかならず臆の大事にお互様なり左れば序
 文もお断り申すべしと云へは散士曰く然らば
 序文の鍊輪出來の日全篇御らんの上は願ふべ
 し夫れ迄の處の看客へお断りの爲めは以上の
 御口上を拜借せん左やうならと云つた迄の口
 上を書して序文とす

明治戊子の六月

紅夢樓主人

頼まれて誌す

目録

色男を改良せざるべからざる論	
全駁論 全賛成論	數章
東髪と洋服よせざるべからざる論	
全駁論 全賛成論	數章
遊廓のクラブを設くべき論	
全駁論 全異説	數章
演藝を矯正すべき説	
全駁論 異説	數章
壯士必要の説	數章

武士全駁論 獨全異說

數章

彌次馬の必要説

數章

御幣かづきの論異説

數章

盆と正月は昔がよるまい

數章

全駁論

數章

全駁論

數章

全駁論

全駁論

全駁論

持 12
640

滑稽 天狗の討論

放言散史著

發端

ゴロゴロくと響く鐵道馬車の轟くなりガラ／＼と聞える人力車の走るなりカラ／＼と鳴るの朴木履の音なり淺草橋の畔り絡繹として人の北へ向つて行くのうもなよこと初まりとならん 甲 今日の何んです子大さう人が北の方へ行くのでありませんか 乙 左様さ子今日の丁度日曜日ですから向島か淺草公園は何よがあるの御ざいませう 丙 墨田川で競漕會でも有るのですか 甲 乙 競漕會は毎年四月の櫻が開た比で今年ハ最早濟みま 丙 ソシナラ公

讀者亦迷ふ

馬車と人下駄の字を省て却りて味ネありカ

園でお祭かお開帳でも有りますかね 甲「ソナ話も聞
 きませんでした」乙「ハ、ア分りました吉原で千五六百
 人のあらゆる花魁小いらんが道中を初めたのでござ
 いませう」甲「マサカ眞日間花魁道中でも有りますまい
 乙「丙」ソレデハねつから分けが分りません」甲「ナンシロ
 人の後へ喰付て行て見ませう何れ面白所へ出喰すだ
 らう」三人「サア」急げ「ゴロ」グハラグララ
 「カラ」ンカラ「ン」ナンデせう今日「たい」ろう書
 生さんや官員さんのやうな人が北の方へ行きますね
 い「丑」今日「恵方詣り」でせう 寅「馬鹿言な」さるな「恵方詣
 り」の正月「極つて」居ますワ「丑」ソ「ン」なら「四万六千日」で
 せう 寅「それ」も「極つて」居りますワ「丑」困ります子何「よ」か

大の字がいかネ

致て下さいまむな 寅「何」よか致てくれつた「私」の「よ」も
 分らんから仕方がない 卯「貴君」方「御」ぢ「御」さいま
 せんか今日「なん」で「御」さいます子 寅「それ」が「サ」分らぬ
 ので「私」たちも「評議」して「る」ので「す」時「卯」吉さん今日「の」
 なんて「あんな」よ「人」が行くのでせう 卯「知」らないから「私」
 が「今」お「聞」き「申」したので「あ」りませんカ 寅「お」つと「縮」尻
 たり 戌「モ」シ「あなた」方「早」く「行」つて「御」らん「な」さい今「の」
 日「日」曜「た」も「ん」で「す」から「井」生「村」樓「今」の「鷗」遊「館」と「改」ま
 り「た」れ「と」此「人」の「口」よ「井」生「村」樓「と」云「ひ」な「れ」た「故」よ「か
 く」申「せ」し「なり」の「河」岸「よ」大「き」な「土」左「衛」門「が」付「た」つて「大
 そう」人「が」行「て」見「ま」す 子「丑」寅「卯」オ「ヤ」「大」き「な」土「左」工「門
 た」さ「う」で「す」エ、ど「ん」な「よ」大「き」な「の」で「す」 戌「私」も「ま」た「見」な

居たり姑くして定めの間即ち午前十三時七十分と云ふ舶來時間一相なりければ會員三十名餘りの左右に分れて二行一爲り各椅子一倚れり正面一は議長席を設けて其右一の警察官の席あり其左一の書記の席あつて討論の様子を筆記さすること宛も議事會と演說會を一所一混合したる如し其時會主面城井太郎の議長席の傍一進み出で傍聽人一向つて先づ開會の主意を演べ出たせり

諸君よ諸君今日かく好天氣でありますして諸方の公園地なごの遊歩人が山のやうありますと云ふことですが彼れ等の實一合手一ならぬへチヤモクレンであります然る一諸君の伶俐なるかゝるへチ

ヤモクレンと同様一遊歩一出かけず此滑稽討論會の傍聽一御出でなされ爪も立ぬ窮屈を御辛抱くたさるとい實一有りがた山の鳶鴉と云へざるを得ませんソレハさて置き私一一寸開會の主意を申しあげますが外でもありません方今一御代太平でありますして自由黨や改進黨が彼れ是れと八釜しく演說をする事件もありませんイナ有るか無きかの知りませんが現在民權とか自由とか云ふ連中が火の消たやう一爲つた所での別段演說で叩くおとも無き世の中と思へれますそれとも叩けぬのか一知らねと然る一持つたが病の饒舌好の我々を初めと致して鳥の生れ替りたる連中のどうも何よかお一

やべりを致しませんが溜飲が溜つて困りますよ
 で昨年中滑稽演説と云ふことを發明いたした人が
 有りまして一切然り而して則ち寧ろの固くるとき
 ことをお止めな致して専ら聴衆のお笑を買ふこと
 をつとめなしたさう致しなすと忽ちその演説が流
 行をいたしまして續々と開會するものが出来ま
 たなるな是は能き考であります然るは惜ひこと
 よいつ肝腎の魂と云ふものがない演説で云は
 話家か講釋師が講座へ上つて箸も棒もかゝら
 ぬことをおしやべり致して其場でどつと笑を得れ
 るそれで満足たと云ふやうなるものでありました
 どうもうれで一向益なぬことであらうな

なら話家講釋子のお弟子となつて仕舞つた方が宜
 うござります苟も演説と名のつく以上の少く世
 界のお爲めなることを志やべつてもらいたいと
 思ひます(ヒヤ)ソコで私ハ一番新富座か厚生館
 (舊明治會堂)左なくハ淺草の富士の山に登つて大滑
 稽演説會を開き十分滑稽中な世間のお爲めなる
 事を演説致さうかどうんじなしたか待て姑く近來
 のやうな糞も味噌も一所の世の中での私かそれほ
 ど上手な演説しても到底人の眞似をしたとより外
 へ思はれなせんうれが悔ござりますから更らよ一
 番新奇の考を起しなして今日只今開會することハ
 なりなした是れ則ち討論會であります私どもの滑

稽よの魂即ち精神がありますから是までの只おし
 やべりして笑を買へん足れりと云ふものといふ少
 く異つて居りますから其つもりで御評判を願ます
 (ヒヤ)且つ又滑稽の討論會を開きましたるの私
 が先祖で有りますから此後とも外に眞似をする無
 氣力の狡猾家が出ましてもよく御差別を願ひます
 道德の絲爪の皮ほども功能なき世界で直ぐ眞
 似をするお猿さんが出かけるは相違ありません諸
 君如何思ひますお猿が出たら午旁焼て押付るす
 ぐよ面を赤くするだらうさて長々口上を申しまし
 たから私の是で引込みます是れよりいよく討論
 は取りかゝります左様なら

と一禮して引込め拍手の聲の満場は響き姑く鳴を
 留めません良久して場中の静まるを窺ひ右席の初
 當りスツクと起ち上りたるの今日第一番の發論者ど
 見たり年の比の忠臣藏の勘平さんと同く三十な
 るかならずよして目冷やか鼻高く才氣面は顯れ
 たるの二十四孝の八重垣姫ならざるも斯云ふ殿子と
 添へふの身の姫御前の果報ぞの感格を與ふる程
 思ひれたり但し女よ其時其人がエヘンと一つ咳
 らいしたれば場中静りかへつて如何なる名説を吐き
 出すやと待ちかけたりかくて再びエヘンの咳やらい
 と共説き出して曰く
 發論者たる今野丹次郎の色男の如何どの論題を掲

反對して團右工門や荒次郎のする役で女は愛され
 るものがありませうか、シテ福介のどんな役者で團
 と荒とがどんな役者かと云ふは福介の大抵の女形
 は適したるヒンナリ、グンニヤリしたる小さい役者
 でありませう次なる團と荒となつての角力取も遁
 げ出しさうは肥て居て腕力でも顔色でも十分は横
 綱を張つて舞臺へ出てもさうつかへななさうで
 ありますさて又夕ぎりの情夫伊左工門の紙布一枚
 は落ちふれたる説あり梅川の忠兵工の使ひあまり
 て二分はか残らざるを嘆せり梅ごよみの丹次郎發
 論者と御同名で御快愉々々々々々々々々の爲めは御た
 すけはあづかり稲川も金の爲めは鐵ヶ岳は讓勝

やらなければならぬことを發明せり其他女房が藝
 者となるなど、云ふ意氣筋の何れも皆金の無き所
 よりして起る左れば色男金と力なかりけり」と云
 ふ川柳が有りませす然れば則ち昔から女は愛さるも
 のの前の人相書はあるより外にありません然るは
 近來奇ツ怪なる論者ころ顯れたれ其論者の言を
 聞くは曰く色男の改良せざるべからず昔の色男の
 如く柔弱なるものゝ攘斥と去らざるべからず何と
 なれば昔の色男の金なければ國益を起す能はず力
 なければ戦争等の用をなさず今日の如く盛んは工
 業を起し物産を廣めるの世の中はありて女の爲め
 は食ひせて貰ふとき金儲を知らぬ男の必用でな

喜ぶ人
さうま
めれぱ
もある
だらう

い吹けば飛びさうなして宛も梢成の瓢箪の如き男
いさ鎌倉の役は立ぬ因つて色男を改良せざるべ
からずと然して彼改良論者か注文する色男の人相
書を見るは概ぬ左の通りなるべし

- 一 筋骨太くたくましく
- 一 色黒
- 一 髯多
- 一金満家
- 一 活潑
- 一 議論強く
- 一 氣力勝ち

右の條々は適合したるを宜ろむとします丸るで
是での昔の色男と反對でありますから論者が注文
よまかすれば是まで女は嫌はれたるものを以て女
よすかせやうと云ふやうなるもので實は大改革で
ありせんか此改革論が出ては速も社會の問題と
い爲りまますまいと思ひの外段々之を賛成する人が

共狀と
見ると
と

有りますすが實は驚き入つたる事で有ります一躰諺
よも思案の外と相場が定まつて居りますよ理窟
と議論で色事を押し付けやうと云ふは實は野暮の
隊長と云はざるを得ません故に私に色男の相場は
矢張り昔の通りよ定めて置きたいと思ひます諸君
以て如何んといたします
と其言未だ畢ざるよ左側の中央よ當つてノウー
と呼びかけたる人あり満場の人を反對者の色男が
顯はれたりよ萬目一齊に其人よ注げの七八番目よ當
つて傲然として立つたる人あり其人の有様と云へば
頭髪亂散として蓬の如く髯は縮れて左右よ捲き上り
其勢燕人張飛もかくやあらんと思はれたり其時其人

は頤の髯を逆まよなで上げながら
 拙者の黒田力雄と申すもので有ります只今々野丹
 次郎君が色男の議に付ての全く反對の説を抱くも
 ので有ります今野君の色男の思案の外たから倒底理
 窟と議論で押付けられぬ故に色男は昔の通り
 よ致し置くべしと申し申しましたが是は如何も目先
 きの低い御議論と云ふに及ばず人間の心と云ふもの
 は随分學問的を以て變化することが出來ます其証
 據は多く孔子の書を読んだ人は顔回のやうな人を
 慕ひ洋學者向きの人を嫌ひますが西洋の學問をし
 た人の顔回なぞ丸るで馬鹿のやうに思つて居り
 ます又佛書を読んで信向する人の耶蘇をたいへん

よ嫌ひますが其かへりに又耶蘇の信者の佛を駁す
 こと糞のやうで有ります又民權黨の新聞を読む人
 の自由をひびきし吏權黨の新聞を読んで居る人の
 民權家を過激家だと嫌ふやうなる理屈が有ります
 れハ學問の能く其人の心を移すことが出來ます左
 れハ昔の父親が娘を教育するに常盤津や清元など
 を以て三尺ばかりの中からお染久松とかお半
 長右工門とかの文句を大に聲で歌はせ此の腹帯
 のせうじやうぢやうへだのお半おぢやなをやらかさ
 せる故に其兒が成人すれば實地に此腹帯とお半れ
 ぢやを演じますソコで小供の時から淨瑠璃も有
 れ小説も有れ芝居もあれ顯はれる男が雄々しく

くもて武力を好むとか磊落活潑ふて大度ある政
 治家とか學者とかで此ものが女は愛慕されるやう
 出来てあれは自然に其通りな人を愛慕する了簡
 が出るよの相違ありません左すれば昔の如きお平
 の長羊然たる男を見れば忽ちノツペリスツペリと
 してイヤラシイとの感格を起し金と力なかりけ
 りの男を見ればア、生地なき奴ちと云ふ思想が顯
 へれます現今日にあつても少くも文明の教育を
 受けたる娘は役者などのノツペリしたのを見れば
 ア、不便なものぢや堂々たる男子のくせはアンナ
 女々しき風俗を以て無氣力とい彼れ等の事なるべ
 しと擯斥して願ひぬものが有りませ昔の女が何よ

り大さわぎを致しましたる役者ですら斯やうにな
 りましたからまして只お平の長羊を以てノツペラ
 して居る無金無力主義の色男の鼻もかけません斯
 云ふ教育の届た娘はどうか學者を亭主は持ちたい
 とか軍人を夫よじたいとか云ふ高尚の心を抱てか
 ちよ世間と學問止若くは政治上などで名譽を博し
 たる少年が在れば窃かよ之を慕ふて見ぬ戀はたか
 れる娘も段々よ出来てまゐります西洋での徴兵を
 勤めた人ではなくての婿にすることを一般に嫌ふ國
 がらも有り政治上の主義は因つて其男を慕ひ爲め
 は一命も惜まぬものも澤山あります故に日本でも
 淨瑠璃小説芝居など昔流の色男を顯はと居る

ものゝ遠慮なく停止して務めて國益をなす人を色男よこしへかのノツペリとしスツペリとしたるお平の長辛黨を攘斥すれは遠からずして一般に色男の種類が改まるてのお茶漬の御膳をかきこむよりも平氣であります只諸君の熱心が薄く此改良を遂げて國を富强に致さうと云ふ愛國心は乏しいので困ります今野君の如きの隨分社會の上流にお立ちなされる方でありながら矢張り之を賛成せぬ計りでなく却て昔の色男を賛成するの慨嘆は堪へませんと説き了つて席は復せり是より今野丹次郎もやつきとなつて前説を維持し黒田力雄も獅々舊迅の勢にて論駁し又両方へ賛成者も出でたれど結を取らな方て

黒田の方勝を取れりかくて第二番目の發論者出杉物之介の
私が今日の此の會場に向つて發したる討論題は彼處の壁上に掲示してあれは諸君の既御承知のこととでありませう即ち束髪と洋服と申す題にして其意は今日我が邦の婦女社會に於て其頭髮と衣服との模様を束髪と洋服とに改良せざるべからずとのこととて發題者即ち私に此の改良主張者であります私に於て今日我が邦の婦人の結髪は束髪はすべく衣服は洋服に改良せねばならぬと存じますと云ふ發題者の出杉物之介は先づ己の束髪と洋服と云ふ發題者の出杉物之介は先づ己の

發題の意味と其主義とする所を演じ終りたり會場の
 の左側の中程の席よりありたる西洋毅頼の出杉物之介
 が婦人の風俗を束髪と洋服とよ改良せねばならぬ改
 良すべきなりと云ひ出せしを聴き鉢中自とふるゝ
 として振へ出し口をむづととして物云ひたげまな
 と居るの問はずして其出杉物之介の反對論者よして
 婦人の風俗を束髪と洋服とよ改良すべきと云ふこと
 の大の禁物蛇が煙草のやよを嫌ふよりも尙ほ之を嫌
 ふ人なりとの知られたり去れば出杉物之介が演じ終
 りるや否や直ちよ起ち上りて議長十四番とさきも意氣
 込みて呼りたり其時議長と呼ひ上げ起ち上がりた
 るゆの四五名ありしが十四番の西洋毅頼が起ち上り

りしが第一番ありしかの議長の十四番と呼びて
 西洋毅頼が發言を許したり十四番(西洋)の議長の許し
 を得出杉物之介に向つて駁撃を試みて曰く
 五番の先生(出杉)の此の束髪と洋服と云ふ題の發題
 者よして今其題の意味と其主義とせらるゝ處を演
 べられたり本員の五番(出杉)の説は反對ともく大
 反對の者なれば直ちよ其論陣中よ突進して其陣營
 を一駈けふ駈け散ら呉れんとし思ひしが五番(出
 杉)の演べし所の只我が邦今日の婦人社會の風俗の
 束髪よせねばならぬ洋服よ改良せねばならぬと云
 ふ迄よ止まりて如何なる理由譯合あるを以てかく
 せねばならぬと云ふたさねばならぬと云ふことな

かりを以て反對論者に於て之を攻撃せんとする
 よしかと陣營を布いたる敵よもあらざれば堂々旗
 鼓を整へ攻むる迄よも及ぶまじと思われます五番
 (出杉)の如き言ひ様よての反對論者よ於ての我が邦
 今日(今日)の婦人社會の風俗の束髪と洋服とよ改良して
 のならぬ改良すべがらざるなりと云ふより外はな
 きなり去れど一方の改良すべし一方の改良すべか
 らずと互ひよすべしすべからずと云ひ合ひ居りて
 の小兒の喧華の如く片方が馬鹿やいと云へば片々
 がセヨットと云ひ返へすが如く頭底果してなけ
 れば馬鹿な事よ可惜貴重(貴重)の光陰を空しく費すのみ
 よて愚の頂上馬鹿の極點と云ふべきことでありま

前文が
 長ひぞ
 早くや
 れ

す併ひ五番の發題者なれば斯様な兒戯よ類じたる
 論陣を布かる、筈なく只今のの本の序文と云程よ
 も足らぬ角力で云ひ始めの矢倉太鼓とも申す
 べきもので此らか我こそ三軍の勢を引率して舌戦
 を試むる者なりイザ我と思はん者よ來つて攻戦を
 試むべしと云われたる迄の事よ過ぎざるべしと考
 へられます因つて本議員の馬を敵陣へ突進して一
 駟けよ駈け散ら呉れんと思ひしことよ止まり敵の
 むかひと陣營を張りたる時を待ちて本議員が手並
 不間違つた口並口並も可笑しい示し呉れんと思ひ
 ます本員が今敵の陣營を布かざるよ乗せて之を攻
 撃することよをなさず敵の正々堂々と陣營を建つる

を待ちて交戦せんと思ひます併し之の宋襄の仁と云ふべきか藤原頼長が爲朝の言を用ゐざりし愚なる所爲を學ぶ者と云われんも知らざれど此と彼と大に異なりて今敵は於て陣營どころか兵馬を出したるよりあらずしてホシの戦をしやう軍を始めまじやうと云ひ出したる迄なれば打ち破る迄もなく捨て置けり幽霊と同一こと自然と獨りて消へてしまふ者でありますから如何に攻撃せしやうと思ふ共攻撃のしやうもなく攻撃せずとも澤山んなれば本議員のかく申す迄よて止めませう敵軍若し兵馬を出す時本員も亦越後の謙信を兼ねて青竹でも持つて士卒を指揮し敵を一戦の下に打ち破

り呉れんと思ひます本員は先づ此の言を止めて敵に即ち五番出杉の番を待たせし思ふなり本員は十四番員西洋教頼の勢を見るは其様体たる其説の定めて霹靂一聲を以て大に驚かすなりと大聲叱呼して一言の下に五番議員出杉物之介が説を打破り去らんと思ひし中々さうなくして嘲弄五分と滑稽五分との配劑を以て敵は發汗せしめて其急き込み來るを見て容易く之を打ち破らんとする勞を以て逸を待つと云ふ兵法を取り心者と知られたり中々擣數王者の人にて只西洋のさうらひとばかり言ひ張つて居る頑固連とも見られませぬとながら其言論を徐々に出されし其才智絶巧者といはる所にして其心中

平生一方余の風俗殊は女子の風俗の東髪や洋服の多
 きを見て面白からぬ氣はて居りし者が今出杉物之助
 が言を聴きて已れ迄が加やうのことを云ひ居るかな
 とも知らぬ奴がナニ小酌ナと憤り堪えぬ様子に十
 分見えますが言論の法の急ぎ込み過ぎり巳の意想
 を充分に述べ盡さずとて出来ずよく長く述べたれ
 ばとて後先間違つたり色々してしまらぬ所にて負け
 を取る者なれば已れがのやる氣を押しへて反つて敵を
 あせらさんとせしことゝ其時よ笑を含みて云ふ中
 眼中より十分は怒氣を含みたるを見り察せられたり
 五番出杉物之助は今十四番西洋殺願より嘲弄半分は
 攻撃を受け心中已は丸分の怒氣を起したりも此の

者の名の如く衆人集會などの場處にて出過ぎて能
 く物を言ふより公衆の席にて議論することなど
 云々狎れしこと見えたり氣なき体にて十四番西
 洋の言異るを待ちて其發言を初めたり
 今十五番の本員が論は反對者となれば本員が陣營
 を一駆け一駆け散らすのだが本員の未だ陣營も布
 かぬ否兵馬を出したる者にてもなけれは攻撃の暫
 らく見合せ居りて本員がしかと陣營を建てたるを
 待ちて大層な正々堂々と王者の軍の如く六軍
 を引率して本員は敵向のんと云はれたり本員は於
 此に誠し恐るしきを申したいがお氣の毒さまたか
 せつと恐るしきも怖くもなんとも思ひれず蚊の

喰つた程の感覚を起しません本員の己は戦争を宣
 布したる上なれば愈々出軍の運びをいたさ孔明が
 八陣の法は八倍して八々六十四陣を布き列らね仲
 達ならぬ敵が膽玉を取りひらぎ呉れんと思ふなり
 本員が方今我が邦婦女社會の風俗ハ束髪下洋服と
 改良せねばならぬ改良すべしと云ふ所以の者の
 左の理由と譯柄のあるは因つて然る者なりと云ふ
 ことを示すべし我邦今日の有様ハ如何なるぞ又如
 何なる時なるぞ西洋諸國と交際なす時なりシテ又
 其れ附合ひを始めたる日ハホシの此間のことよ
 即ち昨今のことを云ふべし其昨今のお附合ひの
 間柄よ何れも岐も西洋諸國のするやうよして些と

負けず劣らずよやらかさんとする有様の今日の
 日本であります此の有様で此の時である其時ハ恰
 好生れ合はしたる者の如何したら宜うござりませ
 うソレハ知れたことよ其時の有様と其時とは連
 れて行くより仕方ありません否只た一連れて
 行かるゝ丈けのことでのいけません何んでも自分
 が其時と其有様の進歩を早めて行かねばなりません
 ん急がせてゆかねばならぬものであります去れば
 今日我が邦の人民の務むべきことハ云はずとも知
 れたる西洋の風を學んで少とも早く西洋の國々よ
 負けぬやう劣らぬやうよいたさねばならぬことハ
 考へられませす此の本員が云ふ迄もなぐ世間已之

を待つて居りませぬ扱又此の有様と此の時に出合
 づたる婦人のきりもたらば宜しうありませる今の
 婦人の昔の婦人といふ大違つて居りませる此の月
 と體どころでいさゝません昔も我が邦の婦人の内
 まづつかり引籠つて居るのが本職で亭主の留守は
 の來客の男子の勿論のこと女子も遇ふことを
 禁じられて居りまして是非無據事柄のある時なら
 どの亭主は斷ならずして外の人は逢ふこと出来
 ぬ法でありました西洋の風は此といふ大反對あべ
 どもはもて婦人女子たる者は交際止は於て尤も
 必用の物品となり居りて其夫の交際を能くせしめ
 其交際上よりして夫の身は利益あるをむるやうは

て行く者の全く婦人女子の力はあると云つてあ
 りますかやうな交際上は於ては婦人女子の大事の
 道具となつて居りますから昔の日本のやうなヤレ
 亭主の留守は客の會つてはならぬ亭主は斷ならず
 して外出してはいかぬと云ふては居られませぬ亭
 主の留守と雖も客が來れば之は逢ひもせぬやな
 りませぬ時は因つては口を接はねばなりませぬ場
 合によつては手も握らねばなりませぬ舞踏會はの
 抱きあふこともないともいひられません此の時或る
 會員低聲よて曰く時は因つては寝ることもありま
 すか亭主が居ない時人を尋ねて行くこともあり
 ます人は逢ひは行くこともあります人を誘ひ出さ

は行くともありません或る會員曰く相引きする
ともありませんか番主の留守の時のみ亭主が居
ないから無據かやうにする譯でありません亭主
が居ても交際止のこと婦人は於て取扱ふて行く
ことよなつて居ります去れば亭主の前で接吻もし
ます握手もします抱合ひもします或る會員曰く寢
ることよ如何でしやうかやうは西洋の婦人の交際
のことよ付けて働らかねばならぬこととなり居
りますから人は逢ふの恥かしい人の中へ出るの
の怖いドウモ男は話をするのさきまりがあるい
のなんのかのといふやうな引籠み主義といふ大い差
つて居りますて人は逢ても耻かゝがるの人の中へ出

て怖がつて震へて居るの男は話をするのさきまり
があるいのなんのと云ふやうな不体裁のこといあ
りません人は逢へばズンズンと云ひかけます人
中へ出ればとて怖るの憶するのと云ふやうな事な
く男は話をするとさきまりがあるいのなんのと云ふ
ところでなく却て男を閉口まして仕舞ふやうな話
かけます其活潑なること實に驚きます誠な感心し
ますサア西洋の風俗のやうの有様でありますか
ら今日の日本の此の風俗を學ぶ時を既に開化人の
之を學んで居る有様であります此の有様と此の時
とを生れ合はれたる今日の婦人女子のやうに此の
西洋の風俗を取るべきが當然の事よとて是非を

左様はし行ぬはなりません其交際上の事
 婦人が立入る法を行ふは今迄のやうな島田の
 頭がはましくと振袖が地を引くやうな身装で
 甚だ寫りが悪うござります引立ちませんや
 頭の束髪よして身装の洋服の出立でなければ
 ません三枚重ねの紋付丸鬘の奥さん然たる装束
 はては不活潑で見悪うござります殊は西洋で専ら
 行われ居りまして我が邦の貴顯紳士の御邸や御
 宴會の節なを行われませ彼の舞踏會であります此
 の舞踏會の交際上必要でありますソレテ婦人の此
 の舞踏會の一番必要の物であります婦人が此の舞
 舞會場は臨んで丸鬘や島田の頭は紋付振袖の身装

を以つてしては跳つたり反たりするは不便利であ
 りますソレデハ如何すればよいと申すは其處で本
 員が申す如く頭の束髪よして身装の洋服はせねば
 なりませぬ又人と交際するは先方がすき好むこと
 を此方で私はいやです嫌いでございますと云ふて
 居ては何んたか兩方の仲合ひが面白くありません
 先方のすること此方でもせねばいけません眞似
 てかまぬこと嫌なこともするがやうござり
 ます互ひに我儘を云はずよといつてこそ始めて
 交際が王合よくして行けるものであります凡そ之
 をしては害がなく益があるはとあらは眞ねばなり
 ません西洋と附合ふから西洋の風を學ばねばな

りません日本の婦人の西洋の婦人の風俗を學ばね
のなりません束髪はすれは頭は垢なほが溜ること
が少なうござりまして腦病を患ふことがありませ
ず洋服はそれハ胸膈が開ひて肺病を病む患ひがこ
ざりません又此頃の西洋はても大分日本の風俗を
學んで來まして婦人社會の振袖などを着る者が
出來て來ましたと云ふことでありませすが此の西洋
の婦人の交際が上手でありますから此様おぼるの
であります此方の風を先方でヨイと譽められて仕
て貰ふと此方の氣合が大變違ひます甚だ嬉しとい
とであります一寸と先方の人は挨拶するよも丁寧
よしとす此方の風を先方でして呉れるのがヨいと

思ふなら先方の風を此方としてやればやりの先方
はも嬉しといと思ふは違ひのありませせん先方の氣合
と申す者が大變は能くなつて來るは極つて居りま
す斯様は先方の風を學べば交際上又の衛生上は於
ての利益があります是れ本員か方今我が邦の婦人
社會の束髪と洋服とを改良せねばあらぬと云ふ所
以であります未だ々々申述べたきことハ澤山あり
ますが先づ陣營はげをかやうは布て於て敵の討て
かゝるに從ひ臨機應變段々と演べませう
五番出杉物之助の中々場馴れたる才子と見えて永々
と演ぶたるが其議論たるや輕薄よもて味無く漢學者
は評させたならは蠟を啣むやうたとも云ふやう浮

調子で骨のなれこと海月のやうなる言分であります
 から餘り響むべき人物でない感心すべき者で、決
 してありません。ホ、無用事を云つて討論のお邪魔を
 して、いけません。見物否、傍聴でもない。讀者諸君、
 叱られませう。十五番西洋殺頼の五番(出杉)が演じ畢る
 を待ち兼ね、面持ちよて人の云ひたさぬ中よと一生
 懸命よ起ち上り、尙ほも嘲弄半分よ曰く

五番の孔明の八陣でも中々本員の攻撃を防禦する
 ことが出来ぬ艱難いと思ふたど見えて孔明を八倍
 もで八々六十四陣として陣營を立てたりと云ふ故
 如何なる陣立てて金城鐵壁の如き者なるかと思ひ
 ぬ。外陣法よも何よも協ぬ吹と飛んで仕舞ふやう

な者であります。然るよ其れで以て堅固な大丈夫だ
 と云ふて安心して居るところ笑止なれ。調度燦燦が蓋
 をこつかりと閉て此れで己の大丈夫だ心配するこ
 とがないと云つて威張つて居ると同じこと、可笑
 のめさて置いて可憫想よ思ひれます。併し折角陣立て
 して戦ふと云ふ心の程が殊勝氣であります。から正
 々堂々と陣立てする迄もなくホンの朝食前の仕事
 よ一寸と追散らして再ひ此方の國境(否)論境へ足履
 みさせぬやうよしてやりませう。決して長がたらと
 く辨ずる迄のことはありません。五番(出杉)の天から
 犢鼻禪の下つたやうよ長たらとく論トまじたが其
 金城鐵壁のやうよ大事として根據とする所の主意

の交際するは婦人の束髪と洋服でなければ行ぬ取
 分け交際上に於て必要なる舞踏會は在つての婦人
 の束髪と洋服でなければ叶ぬ又衛生上は於ても
 束髪と洋服とはあらざればならぬ先方でも仕て呉
 れるからよの此方でも仕てやらねば濟まぬと云ふ
 の外は出ません先づ段々其非なることを辨じま
 せう第一男と女と口を接ひ合つたり手を握り合ふ
 たり抱き付つたりするよの束髪と洋服でなければ
 不都合だ男と女と話し合ひするよは束髪ト洋服で
 なければ不釣り合ひだと云ひまじたがコハ何んた
 ることとでありますや男と女と接吻したり握手し
 たりすることがヨイことか抱合ふことが尤のこと

牛のの
 ツをの
 ツをの
 かしよ
 よみよ
 シの
 シの
 なる

なるか此ンナことをせずとも交際の出来ませう島
 田や振袖で人よ挨拶がならぬと云ふ譯もなと不似
 合のこともない反つて島田や振袖の御嬢さまの御
 挨拶のひとやかよして上品なり丸鬚で三枚重ねの
 紋付よてチヤンとしたる有様の自然と奥床く馴
 るべからず犯すべからずと云ふ所ろがありますソ
 レを牛の糞を頭よ載けたるやうな髪よ結ひ体軀よ
 喰付いて居るやうな究屈の筒ぼ袖の身装が何處か
 ヨイてござりませう一体男女の服を論せず洋服と
 云ふ者の野蠻の國で着る者で文明の國で着るもの
 でのありません又此の荒働らきする者が着る服で
 疊の上で仕事をしたり几よ向つて本を讀んだりす

る者の着るものでありませぬ殊は奥様やお嬢様が召す者でありませんサゼト申すよの野蠻の時今日日本などで着る着物のやうな廣袖の寛ひたる衣服などの中々考へも付かぬことにて身体丈け即ち手の手のやうは足は足のやうは丸く細く長く仕立て、やうやく肌を蔽ひ寒暑を防ぐ道具となせしなり西洋人のソレヲ改良することを知すにて只丸く細長いばかりの者で面白からぬと云ふて糸で彼處此處と飾を喰付け女の服の方よのベツタヤタラと稜角を付けて飾りとまたる迄なり又東髪も同様の事よして丸鬘や島田よ結ふことを工夫と得ざりしよよりグル〜と巻付けることよし其

れでの愛嬌も何もないとて薔薇や椿の花を無性矢鱈と指して面白みを付けたる迄なり此の束髪は何よも西洋へ行へる、珍らしひと云ふ者でなく反つて此方での賤むべき者であります田舎へ行つて御覽なさい田舎の田畑と鋤鋤を以て耕したり耘つたりして居る女の頭の皆髪をグル〜と巻付けてソレは椿か何かの花などを指して居ります取りも直ほさず此れが束髪であります西洋の束髪と何處も遣つて居る處のありませぬ只だ彼れ一つ束髪での髪きやすいと云ふて彼方此方と手を換けて見て牛の糞やうの中は色々種類を拵へて其れよ小兒が徒らするやうに無闇と花を喰付けたる計り

日本も云ふやあつて見
ふと云ふやあつて見
ふと云ふやあつて見
ふと云ふやあつて見

なり何んも面白ひことばない尋いこともない實
見飽きのくる馬鹿々々しい風であります又
我が邦の職人の装をを覧なさい筒袖も、引で
ありませんか西洋の服の此れは少々あやを付た
云ふ迄のことです何んでソレがヨイヤラ皆さんが
洋服々々と云ひる、御心が知れません又舞踏會で
の束髪ト洋服でなければいかぬと申しましたが此
の根から間違つて居ることなれば其論の立つこと
が出来ません一寸と押すと直ぐトンと倒れて仕
舞ひます一体舞踏會と云ふ者が餘り好まとい者で
はありますせん若い男や女が手を取り合つて一處は
跳つたり反たりするのがヨイヤとせうか互ひは

失張ス
キブス
キでせ

衆人公座の中で抱き合つたりとつ付いたりして舞
ひ廻るのが禮儀でありますか此ンナことが作法
なら愈々此の風を増長さして仕舞は衆人公座の
中、於て裸体で抱き付き合つて躍ることと譽れよ
なるやうな仕儀よなりませう本員、此の舞踏會か
らしてあらずもがなとするよ其舞踏會を土臺とし
て論を立てるこそ笑止なれ又衛生上の點からして
論じましても洋服がヨイヤと云ふところのありませ
ん獨逸の或るドクトル先生の日本へ來たりて日本
の衣服の有様を見て大に感服じました何處を感服
じましたと云ふよ寛ひで居て体が究屈でないが第
一番で又た肌が外氣よ觸れることが常よ狎れよな

つて居れば不意外氣も襲はるゝことがありませぬ
 も其の餘計な害を受けることがありませぬと申ま
 した又女の洋服の腰をゆめ付て蜂の腰のやうにす
 るのが体の爲めよなること、思ひますか、知りま
 せんが何んでそれが爲めよなる者でありませう衛
 生の點からしても洋服の矢張り取る所がありませ
 ん又先方で此方の風をとて呉れるから此方でも先
 方のと氣嫌を取らぬはならぬと云ふは抱腹絶倒お
 臍が西國をいたします程の議論で笑ふに堪えたる
 ことであります先方で此方の風をするの、一、此
 方の風がヨイのと又一、先方で奇を好む心よりと
 て爲るので決して此方の氣嫌を取る爲めでも何ん

てもありませんソレを此方でも何んのかの自分好
 がりで悦んで此方でも先方の氣嫌を取らぬはなら
 んなんぞとい途法途轍もないことでもあります随分
 人と附合ふよ、先方の氣嫌を取ること、も入用のお
 とでありますが隣の人が縮緬を着るから已れも縮
 緬の着物を拵えぬはならぬと云ふ譯合の有りませ
 んぬかく論じて來ますれば五番出杉のよととする處
 の一も取る處はなくして折角の六十四陣も粉な微
 塵となつて仕舞ひました最早や軍門は降参したで
 ありませう
 此の時七番と呼はりて起つたるの曾良出太なり
 本員の一言以つて五番員の説を確めて置きます一

体口を接ひ合つたり手を握りやつたり抱き合つたりするのの交際の道は於て尤も勢力のあるものでありますかの鴛鴦衾裏のむつごとく一番男女交際上は於て親密なる法であります併し幾ら此が交際上親密なる法といへうれか衆人の前でエヘンとして其の雛形も不適當か知らぬと接吻したり握手したり抱合つたりすれば他の方法より大い勢力がありまされば此の尤も行ふべき者と思われます因つて舞踏會の必要の物でありますかやうの理合なれば束髪ト洋服でなければ行かぬと申します

九番と云つて又出田嘉の起上り

今七番(曾良)の交際上鴛鴦衾裏のむつごとく交際法尤も尊むべきなれどもマサカ人前での之を行ふことの出來ないから一等を降して接吻握手等の法は因るとの設なるが此の怪むかることどもなり鴛鴦衾裏のむつごとくが交際法の尊とむべきならば之を行ふたならば善きサウあ者たは其の之を行ひぬのそれの餘りだからと云ふ筋合てしやうが餘り説でソレを排除するならば接吻や握手の矢はり餘りなことの有りませんか踏舞會で春風は誘われやすき若い男女が抱合つて飛んだり反たり阿娜なる他人の奥様を目尻の下つた殿方が腕を組み合つて踏り

このイケません其證據よの近頃やんとなき御方々さまの御宴の庭よ束髪洋服打扮の夫人令嬢の数は減じて振袖島田や丸髻の紋付の奥様姫方の数を増したと云ふこと又印刷局よ數百人の多き婦女が雇われ居る其中よ此頃よての束髪の者よ僅二三十人許の頭數よ減じたるよしでありますか未だ懲りもせず束髪と洋服の改良を主張するとい何たる盲目論者なるや些ト岸田の精氣水でも用ゐたらばよかるべし

是よ於て論辨や、終りたれば決を取りけるよ非洋服束髪の方多數の同意者を得て勝よ定りたればやがて第三發論者の發論を許したり第三番目の發論者の遊

廓よ大クラブを設くべしと云ふ題よて阿蘇比繁と云ふ人なり此論題の頗る新奇なれば如何なる説が興るよやと満場堅唾を呑んで控へたり其時繁の袖より白絹のハンカチーフを出して日の邊りを拭ひ回し鼻下の八字髯を左右よ撫でながら徐ろよ説き出せり本員の頗る奇妙なる論題を掲げましたからよ諸君の本員を以て事を好むの空論者と思ひなさるかも知りませんが是れでも本員の熱心よ此論を主張し十分出来ることよ信じて居ります故よ決して空論を好む譯でのありませんさて近來遊廓の本家本もとなる吉原でのおいらん道中と云ふことを初めで(實の復古が)盛んよ見物が出ました是よ於て外

の遊廊での涎を流して羨み、本場の本場だと嘆息いたとまじたさうであり、然るに一時の黒山のやうにまさかつた見物も追々見あきたと見え仕舞いの珍しくもないと云ふ顔をして見物が出なくなりまじたソレ廊中での再び考へ出し何よか永持ちのする工夫を致したいと云つて居るかどうたかさうでありまじ是れさうなくてならぬ筈で追々文鳴怪化となれば遊廊も舊弊計り守つて居たので到底永持ちのありません左れば遊廊の奴原是の失敬に教へてやり且つ勧めこんでやりたさの廊中へ一大クラブを設ける事であります若し我日本娼妓の規則がなくて自由自在好き勝手よ何處よ

でも娼賣が出来又己が心のまよ何處へでも行くことが出来ることなれば此クラブに入りませんナゼとなれば娼妓の西洋の私窩子の如く芝居も有れ公園もあれ遊治郎の多く出かけさうなる處へ行きて客を見付け出し己の巢に喰へ込むと云ふ便利法が有ります幸よ我國での娼妓を一廊中よ押し込めて有るゆゑに誤つてお見立に逢て巢の中よ喰へ込むるの人のありません其のかけり娼妓たる営業者よ於て自家よあつて網を張りお客の引かゝつてくるを待つより外にありません助平根性もない人を無理やり巢の中へ喰へ込んだり順良なる子息さんをだまくらかして浮かれこませる

のよろしくなはい相違ありませんから廊外へ娼妓
 の出ぬの至極世の爲めでありませすが既花魁道
 中の見物なると名をつけて自分から廊中まで出か
 ける奴の既下地の好きなる極つて居ればかゝ
 る者の遠慮會釋なく捕へておも入れ馬鹿おしてや
 るも決して悪ひこと有りませんそこらが娼妓の
 徳分で有りませ然るよおいらん澄とこんで道中
 をし遇ま助平の商標つき鼻の下三尺の男は出あて
 も目尻が下に向て居る人を見付けても手練手管を
 設け之を生捕ることが出来ません左れ一と資本
 を卸して廊中へ煉瓦か何よかの大俱樂部を設け其
 中玉突でも御されパースでも御され加非でも御

されなんでも室内の遊び道具をそなへ置きて花魁
 ハ夕刻より此の處へ出張して二三時間あそひ居る
 こと丁度お茶屋へ仲の町張りをするやうに致し一
 方よ誰れでもかまわず冷と連中も見物連中も入
 り込むことを許し其連中花魁と談話をするの勿
 論共は咖啡も呑むべく共はパースを弄ふべく共は
 玉を突くべく勝手氣儘に遊ぶることゝなしたら
 んよの鼻下み二本棒ある人や目尻の下向きの人の
 忽ちおいらん蜘蛛の網に引かゝるよ相違なしおい
 らんの一匹のお客を喰へたらば早くても遅くても
 本陣たる貸坐敷へ引き上げることゝなすべし是れ
 まこと文明國の風を酌みたる良策なれば速し之

を我吉原に設け以て助平家を退治すべきなり諸君
 の如何に思ひます
 と論じ畢つて坐し復せば忽ち之が反對家こそ顯れ
 たれ是れ誰れぞと見るは横合槍之助と云ふ先生なり
 横合の十里をひと走りよしたる乗馬の如く口から白
 泡を吹て曰く

只今遊廓へクラブを設くべしと云ふ議論を聞くは
 至極綿密に策りたる如くなれど論者が自らも云ふ
 ごとく恐くは空論たるを免れませぬ論者の頻り
 遊廓びいきと見えて其利を計るためは熱心なるゆ
 ゑか其利の爲めは眼が暗んで茲は一つの大害が有
 ると云ふことを考へざるは些とお氣の毒の至りと

云いざるを得ませぬ抑も娼妓の娼法を如何なるも
 のを云ふは一と口は云ふ浮氣娼賣のありませぬ
 か左れば多數の中は娼法上手にして浮氣をせぬ
 ものも有らん身は庭中は在つて蓮の如き潔きもの
 も有らん然れども十中の八九は浮氣は染み易きも
 のゆゑなれば是れ等の徒よかゝる自由を許さば我
 も我もと情人をこしらへてクラブにて出逢を爲し
 情人と遊び情人と語るは無中なつて肝腎のお客
 を生捕ること忘れて仕舞ふは相違ありませぬか
 んでや終は浮氣製造所兼出逢所となるは定まつて
 居りぬを故にクラブを設けるは却て廓中の爲めは
 本利益であり本本員はかゝる説は到底世に

取られぬこと承知して居りますが討論會と云ふ
 ことゆゑ黙して居られず是に於てザラリサツト
 論破すること右の通り
 横合の論終るを待つて起ち上つたるの維毛好太と云
 ふ人なり維毛の悠然と左右と前を見渡しながら
 不開化なり不開化なり横合の議論の天を仰ひて天
 の落んことを憂ひたる杞人のやうなものでありま
 すソんな先きから先きまで心配したらハ娼妓を
 鏡の籠へ押しこめて居て客もなよよも出さぬが
 一番よろしいさうすれば色男をこしらへる心配も
 なけれハ浮氣を起す氣遣もない其かひりハお客
 が取れぬから娼賣はならぬソレとも娼賣せぬで

困らハ矢張りズン〜と出られるだけハ出して綱
 引かゝらせるがよろしい既ハお客を引くためハ
 道中をさせたり見世を張らせたりする以上ハクラ
 ブへ出すも到底五十歩百歩たるの論を免れません
 まして娼妓だからとて人間ハ違ひないから壓制
 で家の中へ押し込んで置くハかりが良策でもある
 まい僕ハ更らハ發論者の説を布行して一層工夫を
 致さうと思ひますソレハ是から相談して大クラブ
 を建てると云つた處が中々急の事ハ間ハ逢ふま
 い譬へも云ふ吉原相談だから賛成しても實行ま
 での二三年も掛だらうソレダカラ此處ろでハ先
 家毎ハクラブのものを設けるがよろしからうと

思ひますツレの家々々々廣ひ坐敷を設けて置いて此
 での誰れでも無代價で遊びは這入ることが出来る
 やうにして冷かき客の此は備へてあるカルキでもな
 んでもして遊んで居る處へ花魁も遊びは來て其目
 尻の下つたらしき人を捕へると云ふあんばいよと
 たらよからうと思ひます
 と此議論頗る賛成を得て發論者のクラブ設置論も反
 對者の論も皆な少數よて消滅し此當分名々々遊び處
 を作るの論が多數を得たり扱次ある發論者の立上り
 本員の發したる題ハ演藝改良論と云ふよて即ち
 本員の今日我邦の演藝を改良すべしと云ふよあり
 傑す而して此の演藝と云へる意ハ芝居を初めとし

て講釋話家義太夫手品師に至る迄從來の仕方よ於
 此ハ又從來の文句よて人の教育となるべき所が
 一としてなく當ハ教誨とならざるのみならず却て
 害となること多きためよ何おも知らぬ娘子供をし
 て私ハ染のやうなことを爲て見たいとかおいら
 ハ久松を一寸やらかして見やうなと爲んでもよ
 い眞似を爲出すいたづら者よさせるハ多く此の演
 藝家の罪であります否な今日の演藝の罪でハあり
 ばせん從來の文句が惡のぞござります即ち之を作
 くり出した人が惡いのでござります其人の罪で
 さいます併し其惡いのを一向よお構ひなくやら
 して居る者もよいと云ハれません罪があるもの

死んで生まれる
居るに生かす
ぬるに格
古の言

でございませう一向お構ひどころか之れをよいこと
のやうにして得意顔よやつて居るのハ尙ほ罪が深
ふございませうサアさうして見れば今日の演藝家の
如何したらやうございませう之を止めよとやうか
ソレでハ家業がなくなる家業がなくなれば商賣が
ない商賣がないやうよなれば金が儲からない金が
儲からなければ食ふことも出来ない衣することも出
来ない食ふことが出来なければ餓てしまふと衣する
ことが出来ず凍えてしまふ餓たり凍えたりすれ
ば死んでしまふ死んでしまふと生きてることが来
出ない生きてることが出来ない此の世は居られ
ぬ此の世は居られぬと美しくもひ女を見ることも出

故に死んで見
く花をみる
でなるか
もがかる

来ない甘ひ酒も肴も飲んだり食つたりすることが
出来ない女と一處に寝ることも出来ず酒も飲めぬ
は肴も食ふことが出来ないといふてハ何よも面白
きことも可笑しきことも樂しきこともない樂しい
ことが些ともなくてハ生きて居る甲斐がないやうな
つてハ詰らんから生きて居られるやうよ又た生き
て居ても甲斐のあるやうよ爲なければならぬ如何
すれば生きて行けて甲斐あるやうよ出来ませうソ
レハ今迄の藝の仕方や文句を改良するよあります
さうすれば家業が出来て商賣がある商賣があるか
ら食ふことも出来る衣することも出来る左れば演
藝家も取つてハ如何でも演藝を改良せねばならぬ

改良すれど教育は益なるソレデモ社会の有益物
 である諸君の定ま御同意でありませうナ
 と得意然とて鼻をすべりたり目をこすりたり髯を
 拭ひたりして演べたてけるを如何にも傍腹痛さうよ
 聞き居たる昔輪通人の名真太郎の言の畢るや畢らぬ
 よヌツト起ち上り八番と呼びて
 今二番員(名真)のさもくもつたいらく演藝改良
 論を擔き(否)を説き出されて衆員の賛成と喝采を得
 やうといたされたやうでありますたがお生憎さま
 お氣の毒さまなこと如何も賛成することもなら
 ず喝采仕つることも出来ません賛成も喝采も出来
 ないばかりでなく一番力を入れてと云ふよん足

らぬが一寸と之を攻撃してやつて置ねハ無闇矢鱈
 と此ンナことを其處らよ饒舌り立て困ります最も
 誰も此ンナことを聴く者ハなからうとい思ひます
 が蓼喰ふ虫も好き々々で萬人よ一人ハツイ道樂半
 分に聴くものがないとい申されませんから本員
 の此處よ其説の非なることを申して置させう本
 員の此の言の管は世間の人の爲めのみあらで二番
 は此ンナことを尤もと思ふて居ることが可愛想ま
 思ふから之を療治して進上いたさうと存じます一
 体演藝即ち芝居なり講釋なり話家義太夫手品師
 なり其爲る藝の普通人を樂しむる爲め也高尚なる
 人を喜ばせむる爲めはあらざるなり人を教ゆる爲

めよあらざるなり人を導く爲めよあらざるなり普通の人を喜ばせざる爲めなり尋常の人を樂まじむる爲めなり中等人でも其中の善いところの取り除けて下等の人種を樂まじめたり喜ばせたり即ち笑ひせたり泣かせたりして其日なり其時なり一時の愉快を買ひしむる爲めなりナニモ之を以て高尚なる學者先生や上流及び中等の上等の人達をして娛愉快を得せしむる爲めよあらず學者先生や上流及び中等の上等の人達に此ンナことで娛愉快を買ひしむる爲めなり幾らも娛愉快を得らるゝ道あります中等の中の下等及び下等の人間に此の演藝よはつて樂しみを得ねばならぬして此の中等の中の下

等及び下等の人間に大体從來の此の演藝即ち芝居なり講釋なり話家美太夫手品師等の爲ることよ因つて其心を樂まじむる丈けの智慧にかなない力にかなないから今日の演藝を改良して此れより高尚ならしめば其人間の智慧及び力を相應せぬやうなる智慧及び力に相應せぬば解らぬ解らぬ面白くもなく可笑もない左すれば樂しみなこといはい樂しみなことがなければ此の演藝家の無用です此の演藝を此の世の中よ存して置く主意は協いません又さうすると誰も演藝を見よも聞よも行きませんさうしたらば演藝家の商賣が出来なくなりませう商賣が出来なければ鼻の下がソラ建立すること

能く食ふこと
計り心配
なる論者

出来なけり腮をつるさなけれはならぬ場合と出掛
 けられるソレを折角骨を折つてしたことが爲め
 一ならずして仇となる者なれば二番名眞の以來
 此の主人を誤まり世を過つやうな無駄骨折りと空
 論にお止なされたらば宜うございませうソレとも
 食なくなつて死んでしまつても矢張り改良したい
 と申されまするか
 此議論の煩る場中の沸湯となり會員中にて双方へ賛
 成不賛成するものありて議論左に分れたり
 從來の演藝の風俗を乱すの元なれば一々改良すべ
 しと云ふ發論者へ賛成のもの
 從來の演藝の下等人の樂みも供するものなれば改

團十郎
よか尋ね
申せ

良するよ及ばぬと云ふ反對説へ賛成のもの
 下等人へのなほさらの事なり芝居淨瑠璃など教
 てやるが近かみなれば此が改良の最も必用なりと
 云ふの議論は賛成する人
 仁義道德など云ふ免倒くさき事を旨としたなら
 ば聞手もなければ見手もなからんとの説へ賛成す
 るもの
 右の如く議論數派に分れたれば到底メチャクメな
 り次なる論題もうつれり
 拙者は坂髮辰藏であります壯士必要と云ふ問題の
 本員が發題したる者よむで今討論は附せんとする
 本發題者即ち本員の聊か壯士の必要たる所以の

大要大意骨髄旨味の所を略ぼ陳と置かんと欲す
抑壯士の國家は必要なるの中々のことなり天下は
輿論を震へすも壯士の力なり廟堂の議を動かすも
壯士の力なり外國を以て恐れとむるも壯士の力な
り鬼人を感動せとむるも壯士の力なり風吹かすも
壯士の力なり雨を降らすも壯士の力なり雪をふら
すも壯士の力なり雷の鳴るも壯士の力なり潮の満
乾するも壯士の力なり地震するも壯士の力なり藝
者を泣かすも壯士の力なり娼妓を悦ばとむるも壯
士の力なり後家を迷へすも壯士の力なり娘を有頂
天とせとむるも壯士の力なり且又商賈社會を動揺
せとむるも壯士の力なり電信を通せとむるも壯士

の力なり郵便の速きも壯士の力なり蒸氣車の瞬速
なるも壯士の力なり蒸氣船の水の上を馳け廻るも
壯士の力なり何は付け彼は付け天下あるとあらゆ
る宇宙間は存在とあるものと運動働きを爲し得ら
るゝ者ハ皆是れ壯士の力ハあらざるハなと若し壯
士なくんば此の世界ハ土人形の如きものなり目口
鼻手足あれども動くことならざるなり眞は壯士の
國の精神なり國の元氣なり壯士の精神なくんば國
の立つことハ出來ざるなり壯士の元氣なくんば國
の一日も盛なることハ出來ざるなり壯士の力此の
如し壯士何んぞ必要ならざらんや壯士の必要此の
如し誰れか壯士を不必要と云ふや必要なるかな壯

只此論
の必要
を惜
むのみ

士必要なるかな壯士嗚呼壯士噫必要なり嘻壯士嘻
乎必要なり何んでもかんでも壯士なり如何しても
かうしても壯士の必要なり必要なる壯士の必要な
り必要ならざる壯士の必要なる壯士よあらざるな
り必要なる壯士でもなんでもなきものなり何處までも必要な
る壯士の必要なる壯士あり縦から論卜ても壯士の
必要なり横から議しても壯士の必要なり前から云
ふても壯士の必要なり後から話しても壯士の必要
なり頭から見ても壯士の必要なり尻から窺いても
壯士の必要なり背をトントンと叩いて見ても壯士
の必要なり腹をポンポンと叩いて見ても壯士の必

必要な
らざる
の議論
ハイン
カケン
よ止め
給へ

要なり手を引張て見ても壯士の必要なり足を引伸
として見ても壯士の必要なり肩を操み腰を摩つて見
ても必要なる壯士なり腋の下をくすぐつても股
を捻ても必要なる壯士なり寝ても壯士の必要な
り起ても壯士の必要なり夢みても壯士の必要な
り壯士の必要なり寤ても見ても壯士の必要なりや
の必要なり死んでも壯士の必要なり生きても壯士
の必要なり倒ても立ても必要なる壯士なり躍ても
も反ねても必要なる壯士なり酔ても必要なる
壯士なり醒ても必要なる壯士なり飲んでも必要
なると云ふの壯士なり喰つて必要なると云ふの
壯士なり必要と壯士なり必要と壯士の夫婦

の如くお半と長右工門の如く小紫と權八の如く時
 次郎の浦里に於けるが如くお染と久松吉之助とお
 七小栗判官照姫の相離れざるが如く笑つても泣い
 ても必要ト壯士の相離れざるなり早く言ふても遅
 く饒舌べつても同トことなり眞直ぐは讀んでも倒
 さし讀んでも違つたことなきなり同じ壯士と必
 要の車の輪の如く何處まで行つてグル／＼廻つて
 も必要なるは壯士なり幾ら喋べつても矢張り壯士
 の必要なりとれ交け黙つて居ても壯士の必要なり
 天上に至り地底に潜るも壯士の必要なり天地のあ
 らんかきりの壯士必要なり天地が滅亡するに至つ
 て始めて必要ならざるなり壯士の必要の天地と共に

よ生死を同じうするものなり何んと壯士の必要の
 大したる者はあらずや壯士のえらひさうもえらひ
 壯士程えらひものなと壯士程えらひものなけれ
 ばこそ壯士の必要なり壯士々々必要々々壯士の必
 要なり必要なるは壯士なり(大聲叱呼して)壯士の必
 要なるが
 會長十二番と呼はり起たるは取田俊雄なり會長の十
 二番と呼びて其發言を許しければ十二番(取田)の
 今六番(坂髪)のドウも長々と壯士の必要なりとて壯
 士の必要々々なるは壯士と懸河流水豎板は水車の
 ぶれ／＼ガラ／＼廻はつたり廻わたり目の回るや
 うは舌を回ひもて壯士の必要なるを述べたてられ

しかば本員なども最早感服してグウとも何んとも
 云ひやうがないやうなれども中々さうでない澤山
 どころか大變は仰山よ云ひなくてならぬ論じなく
 てならぬ論があるサア壯士の何處が必要なのでせ
 う打つてもぶつても壯士の必要なることの見出す
 事を得ません坐らして見ても立たして見ても必要
 なるの壯士と云ふことを見出し得ません裸よして
 見ても着物を着せて見ても壯士の必要なること云ふ
 ことの見出し得ません顯微鏡を以て見ても壯士
 の必要なること云ふことの見出し得ざるなり煮ても
 焼ても壯士の必要なること見出し得ざるなり蒸して
 も炙つても壯士の必要なること見出し得ざるなり粉

よしても團子よしても壯士の必要なること見出し
 ざるなり觀音様へお百度を踏んでも壯士の必要な
 ること見出し得ざるなり壯士の必要なること見出し
 ざるおと妙見様へ百日鹽絶するも見出し得ざるなり
 堀の内へ日参しても見出し得ざるなり成田山へ七日斷
 食しても見出し得ざるなり裸足参り裸体参りしても見
 出し得ざるなりお巡査さんよ見出し得たら知れやうかと思
 つて聞いたらやへり知らぬとお答つたり新聞屋よ
 尋問したら矢張知らぬとの返事なり哲學者の知て
 るたらうと思ふたら是れも同く知ぬことなり
 化學者理學者農學者礦山學者工學者法學士よ
 文學士よ經濟學士よ醫學士よあるとあらゆ

此の番員十
の何れに
多の暇に
大學者や
大和尚
よ聞きた
い行た
不審ら
萬なり

る學者學師よの如何と問ふて見ても本員同様知
らぬとことなり床屋へ行つたらと思ふて昨日削
たばかりの髯をソリよ行つて序で聞いたらこれ
も同様知りませんとことなり湯屋でも分らぬと
のこなり飴屋餅屋牛屋とやも屋何處へ行つても分
らん分らんとばかりの答なり其處で大智識の大入
道の大和尚さんの處へ行つて尋ねたら流石大和尚
た如何よ知れぬ分らぬ筈た壯士の必要でないか
ら壯士の必要なるよ知れぬ分りもせぬ筈ぢ
や壯士が必要でないよ云ふ証據の去年の暮自ら稱
して壯士と云ふて威張つて居た壯士の悉く退去を
命せられしおあらずや若し壯士が必要なる者なら

壯士の必
要の語
の聞き
倦きた
り早く
退去と
し命ぜ
るべし

は如何して退去を命せらるゝ者か壯士の必要なら
ざればあそ退去をも命せられしなり壯士の必要な
らざると云ふ證據の何より此れが第一の證據なり
と本員も成程と感心したり本員の壯士の必要なる
ことを知らなんだと尤ともであつたサレバ壯士の
必要ならざることの六番坂髪も最早分りしならん
壯士の如何してもかうしても必要でないなきものな
り

其次よ立ち舉つたるの鎖田儒齋氏なり少く顔を盛さ
てく苦かくし哉と云ふ様子よて論トて曰く
斯く申すの失敬至極のやうでありますがさてく
無學の諸君よの閉口致します諸君の豆藏かアホぢ

坊頭の如くペラペラと油紙へ火の付た如く
 ましやべり散せを只口のさきで壯士々々と云ふ計
 りで肝腎の壯士との何なるものたか壯士の壯士たる
 所以も極めず實は壯士々々啞話々々ヤン、ヤヤお
 可笑くしてお臍が西國廻りを仕さうで有りませすも
 壯士と云ふの只口さきて自由たとか民權たと
 か云ひ觸らじや、ともすれば野蠻じみたる腕力騷
 を引き起すのが本色でいありますん又衣脾に至り
 袖腕に至るツンツルテンを衣て下宿屋を荒してあ
 るくばかりが地金でも有りません眞の壯士と云ふ
 の今少し上等の品イナ人であります先づ歴史を調
 べて見るよ晋の豫讓が君の仇ある趙襄子を刺んと

して乞兒とまでなつて千辛萬苦したなごが眞の壯
 士でありますされば現在の仇たる襄子すら壯士な
 りと譽めたりと物の本を見えたり又荆軻の燕の太
 子も頼まれて秦の始皇帝と命の取り遣りをせなく
 てならぬ大仕事を引受け此の一番祖の脱どころイ
 ナ命の棄どころとつひに命がけの旅立をして果せ
 るかな秦は行きて二つと換へ玉のなき命を玉なご
 ましたり然るよ其行ときは壯士一だひ去つて復還
 へらずと威張りましたが實に命がけの一件ですか
 ら自分から壯士と云つても耻かといことへありま
 せん是れこそ壯士であります故は眞物の壯士なら
 必要なり偽壯士なら不必要別は文句のありません

彌次馬のひめ
もる論者
も矢張
馬彌次

決を取るよ及ん眞の壯士の必用偽壯士の必用と定
つたるの馬鹿々々しい知れた事なり次の北戸彌次郎
氏なり

本員の茲よ掲げたる如く彌次馬必要と云ふ題を出
したる當人なるが實よコンナ題を掲げ出したら諸
員の本當よヘンテコナ題を出す奴じやべヲボウメ
彌次馬がなんで必要なことか誰が見て
も馬鹿氣た話とちやアンナことを討論する者の安
房ちや對手よせぬがイ、分りきつたことた彌次馬
が何んで必要なものか世間よ彌次馬が澤山ある
から因つて居るのちや左るよあるよ彌次馬必要な
と、何んたることである著よも棒よもつゝか、

先生の
みと蚊
が親類
が有類
まそナ

らぬことを云ひだす鈍間ちやと一粉名とよ粉名と
かゝるでありませうが左様いのかの金丸世間の人
で左様な考ばかりの處を本員のイヤ、造物者
の此の世よ無駄の者を拵へる筈のない蚤人の血
を吸ひ取つたり人の安眠を妨害する者ちやと世よ
嫌はれるが此奴中々の利ものよて人が假寝でもと
やうとするとき蚤のソレデハレ風をめすからと云
ふか云いぬかは知らねど背とも腹とも云はず無性
矢鱈よセ、クリ出すから堪らないエ、ロイ蚤ち
やと云ふて目を覺と蚤よ小言を云へど其人は蚤の
お蔭で風を引く所を助かつたのでありますサア蚤
よは此云ふ用があります虱よも最とも大なる用が

あります人の身体を清潔にして居らぬばならぬと
 との調度之を流川に譬へて云ひませうなら川の口
 へ芥が澤山溜ると水が流れ出す處がなくなつて
 まいます左うすると其水が彼方此方と流れ出しま
 して堤が毀れる當り近處の水浸となつてしま
 ます其弊害の豆蔵を百人雇つて來ても云ひ盡さぬ
 程であります人も左うであります身体を不清潔
 して垢を付けてをれば蒸發氣と云ふて身内は餘計
 な物を吐き出し新しき物を身内は容れる場處を拵
 へます人の身内をして新陳代謝せしむる者は此の
 蒸發氣の功能であります然るは垢が身体に付くも
 其の蒸發氣の出口を塞ぎますから蒸發氣が出處を

無くしてしましますさうすると身内の故い者を捨
 てる道がないから身内は悪ひ物が溜つて來てソレ
 が本となり遂は色々の病氣を引起します近來衛生
 家が身体を清潔よせよ清潔よせねばなぬらと八釜
 しく云いれるは此處の道理であります身体は垢が
 付くのハ斯様な大い害がありますコノ大い害があ
 りますのを寒暖計が暑い寒いを知らせるやうに晴
 雨計がお天気やお天気でないといふことを教
 へるやうにソレ垢が大層付いて來たソレデハ病
 氣が起るぞと人お教へ知らせて病氣の起らぬやう
 します者の何であります風をありませう風が積れ
 ば風が生きます風が生けは垢が付いた證據であり

ますから虱が生きますと人のコイツハ溜らぬと大
 騒ぎをやらかしまして直ぐと身体を綺麗よと出
 ます此の通り虱よハ大い功德があります去れハ何
 んでも功能功德があるものかれハ世間で馬鹿のや
 う云々云々彌次馬も何んとか功能がありますと
 色々穿鑿して見ましたら如何もありませんと
 ありますとも大あり名護屋ハヤンレー城でもつソ
 レガドレダケありますか富士の山程どころか「ロヤ
 ラヤ」山でも追付かぬ程あります何處よありますソ
 レ此處よありますドレ見ぬが何處よあるソレハ
 見ぬ筈であります本員が未だ話とませぬから縦
 と話としまして口で云ひます丈でありますから目

での見ぬませぬ聞かすばかりであります聞か
 すと知れますやうハ耳を扶つて聞かれませう此の
 世を明文よ進める者ハ彌次馬であります御覽な
 い亞米利加の獨立しましたのも彌次馬の力であり
 ます初めから亞米利加中の人が皆な亞米利加ハ獨
 立せねばならぬと云ふ理窟を知つて騒ぎ出した譯
 せハありますませぬ其理窟を知つて噪ぎ出したのハ「ワ
 シントン」「フランクリン」「アダムス」「ミス」等僅の人で餘
 の人の只たワイハと騒ぎ立てた計りであります
 其のワイハ騒ぎ立てた力が積つてたうハ獨立
 が出来たのであります我邦の維新の際もさうであ
 ります尊王攘夷と云ふて諸國の大名や浪人が八益

とく噪ぎまじたが其の尊王攘夷の本當の理窟を知つて噪ぎまじたの指を折つて勘定する位にかあ、
ません後は自分が食へぬところから面白半分、騒いたのてあります然し此の譯分らず面白半分、彌次馬が大層騒ぎ立てましたから遂に鎖か石のやうに堅いと思ふて居た徳川氏の天下を引くりかへすやうな大事を仕出しましたのでありますソレカラ、マダ、有りませす近來自由ちや民權ちやと騒ぎ出しまして一時日本國中を熱湯がよへくり返るやうに騒動させましたが其の自由た民權たと云ふ正真正銘の理窟を知つて騒いだ人の幾等もありませぬ後、の、皆なワイ、連即ち彌次馬でありまして何ん

でも自由ちや蚊んでも民權ちや寐ても寤ても自由ちや民權ちやと只た自由々々民權々々と騒いた計りでありませすが其の彌次馬連が大變に騒ぎましたから忽ち日本國の自由と民權で一杯になつたやうになりましたナント彌次馬はエライ者でありませんか一つお負け、彌次馬の功能を申しますなら東京で何か一つ宗旨でも廣めて見やうと思ひましたとき、マア始め説教でもしまするとコノ彌次馬連の隙な人物でありますからナイ熊公八公アノ何宗がコンド始めて出來て今晝何處で説教があるさうた如何た一つ聞いて來やうぢやないかと誘ひ合つて出掛けますすると説教者の聽衆の中は彌次馬が

來て居るなと見ますと説教の濟んだ後で其の彌次馬先生をマアと云つて引留め酒や肴を出しまして御馳走を始め其御馳走の中も色々其宗旨のありがたいことを話します爲ると彌次馬の大喜おびて歸りまして其翌日から諸處方々へ行きましてアノ今度出来た何宗の大變もありがたいお宗旨ぢやあのお宗旨を信仰すると忽ち利益があるあの何處々々の者の十年も腰が立たなくつて西洋のドクトル先生を見て貰つても此れは迎も治らぬ病ぢや仕方ない此のまゝよて死ぬのを待つより外はないと云はれた程の病人であつたのを或る人よ勧められて此のお宗旨を信心しますと奇妙頂禮七日目の

墨丸の及る過るが
及る過るが
及る過るが

朝ヌツト腰が立ちましたすると本人も餘りのことよ吃驚しまして復たトント倒まして再び腰を抜かしました然と今度の腰をヒドク打ちましたから今度の治りませんさうデス又何處の誰の二十年も手が協になかつたのが此のお宗旨を信仰と始めてから手が動くやうになりました何處の誰ソレの墨丸が四つありましたところ此のお宗旨を信仰しますてから不思議にも墨丸が一つになりました此ハツイ此間のことでありましたが何處のお嫁さん一つ目の子を産みまして大きき苦よして居たところ此のお宗旨の有難いのを聞いてか明暮れ信心しましたら其の子の目が忽ち三つよになりました又手

が二本とかない者が此のお宗旨を信心としましたら
 四本の手が生へましたと有りもせぬことを本當ら
 しく有つたやうは毎日々々隙まかして云ひ觸ら
 して歩るきますからソレで己れも信心して見や
 う我れも信仰して見まじやうと云ふてお参りも
 来ますれば説教を聴きよも来ますかうやつて居る
 内は彌次馬が此のお宗旨の講を拵へるとか立てる
 とか何んとか蚊とか騒ぎ立て、仕舞いはたうく
 立派なお宗旨を一つ拵へて仕舞います此れですか
 ら彌次馬の必要だと云ふのであります彌次馬必要
 の譯はよく分りましたでござりませう
 と、尤もらくらく説き終はるを待たずして二十番員天

野若太郎立つて發言の許を乞ひ駁論を演べ立てたり
 今十七番員北戸の長つたらしく彌次馬の機能を説
 かれて其必要たることを確められまじたが此れは
 此れは以ての外のこととして如何して彌次馬が必要
 なこととありますものか彌次馬程世間の事を打毀
 ずものゝありません彌次馬がなかつたら世間のこ
 とは能く出来て行きませうが此の彌次馬が多いの
 でツイ出来かゝつた事も出来なくなつて仕舞いま
 す一寸と近い處を引いて云ひませうなら今二十番
 員が己れの説を固めんため引いたる我邦近來の
 自由民權論の盛なりと事柄であります二十番員
 が自由民權論の我邦に於て盛なりと此の彌次馬

の力たると云ひました。が此れは飛んだ間違つた事で、我邦に於て自由民権の勢が今日のやうに盛んなりかけて途中で腰折れのやうになつて仕舞つたの。此の彌次馬が噪いた爲めでありませぬ。此の彌次馬が噪がなかつたら今頃の中々盛んな者で亞米利加や英吉利のトウの昔我邦の草履取りか馬の口取位まの仕て居られましたものを此の彌次馬があつた。バツかしく遣り損ねて仕舞ました彌次馬と云ふ者の何んも知らず、只たワイと云ふて騒ぐこと。バツかり知つてるものですか。初めの騒ぎ立つて随分景氣附きますが根がないから少く時日が立ちますと段々氣込みが薄らいで行きまして仕舞

のギウの根も立てぬやうになります。と初めの景氣よかつた事も只た此の彌次馬の爲め。一時バツとした事ですから直ぐに此奴も勢がなくなつて仕舞ます。始めから此の彌次馬が騒ぎ立てもせず、只たシリと盛んにして行けば根を固めて行くのです。から中々大体のことでの悪くなる氣遣いありませぬ。彌次馬の騒ぐの調度、藁火がバツと燃え立つやうな者で一時は中々火の手が盛んのやうに見えても直ぐと消へて仕舞います。只た藁火ばかり消へて仕舞のみならず折角始めから堅木の燃えかゝつて居た者も消へて仕舞ます。彌次馬と藁火との一つやうの者にして本當に何の役も立たない

者です何處に如何彌次馬の必要がありませんか如何
してあるものですか依つて此處に二十番員の邪説
を駁し置きます

かくの如く甲論じ乙駁し互ひに黒ぢや白ぢやと暫ら
く押合へしあひ居たりしが双方共し最早や議論もな
くなつたと見ゆ互ひにあらはの云ひくらべで上足を取
り合つての議論なれば決を取つてもよからうとて起
立し因つて決を取りし彌次馬不要の説に賛成し
て起立せし者二十人の多數より遂に其方の勝と軍
配の上りたり其次に顯れたる明治の今日に珍
らしき人物にてモウ五六年も経たならん觀古博覽會
にあらざれば見ることが出来まいと思ふ人にて頭

のナヨン鬚を頂いて牡丹餅ほごの紋の付たる羽織
を衣たる老人であります其名を天保仙人と云ふもの
なり

御弊擔きの笑ふべきこととあらずと云ふ討論題の
本員が出したるよ一寸と聞かれた人の此の明治
の世の中は此んな馬鹿を云ふ奴がある者か外國人
へ對しても耻かしい次第ぢやと一口に怪名され
るかもでいありません怪名されるは相違ひありま
せんと覺悟をと腹帶をしつかと締めて此の題を擔
ぎ出しました次第で決して仇や疎かなる題ではあ
りません確かな證據がありまじから本員の斯くの
立派なる公衆の席に於て此のことを持ち出したの

でありませす俗よ死ぬと云ふことを嫌ふ人がありま
すが此の尤もの事でありませす本員の知己の家であ
ります其母親が弟息子よ向ひお前のやうな者
ないお前があるので苦勞の絶えなソレだから早
く死んでお仕舞よと何れ付け蚊よ付け死んでお仕
舞死んでお仕舞と云ひ詰てたがたう々々其の弟
息子に死んで仕舞まらぬと云ふおとばなは
尤も思ふことでありませす又日蝕や月蝕を今で
理學者の何んでもないことのやうよ云ひませすがさ
うでん決してありませせん日蝕月蝕天變よとて人
間世界よ於ての尤も謹むべきことでありませす其證
據の支那の歴史を御覽なさい何か國よ變事變亂が

ありませすまへよの岐度此の日蝕か月蝕のひどいの
がありませす此の昔のことばかりでんありませせん近
いことも近いこともソレソレの大近いことと此
の證據立てよ屈竟の事がありませす即ち昨明治二十
年の事でありませす我邦よ於ての日蝕皆既でありま
したすると窮理學者の千歳の一遇たとか萬歳樂と
か何んとか蚊とか騒ぎ立てまら悦こびて居まら
たが是の決して悦こぶべきことよもあらず嬉しい
年でもありませせん實よ昨年の大變の年で我が日本
の歴史上よの立派よ遺るべき凶事が澤山ありまら
た如何ことがあつたと云ひませす先づ大臣が辭職
を爲ませす又た有志の人々が國家の安危の今日よあ

り枕を高ふして眠むる時、あらずと地方から續々として東京へ出掛けました。又た神代より今の文明開化の明治の御年、至るまで我邦に於て聞いた事も見たこともない保安條例と云ふを布令出されて十二月の年の暮の迫つた忙のしい日、數百の壯士が此の東京より三里四方へおつ拂はれました。此んな變事、容易のことではないありません。去ればころ日蝕皆既のやうあ珍らしき天變を以て前方其兆を示めされたので有り。升此の通りの理合ひを以て考ふれば、天變や辻占の馬鹿をした者ではないありません。中々恐るべきものであります。生意氣の者の何んだ。屁羅房女世の中、御幣擔ぎ程馬鹿な奴がある者か。

死ぬるときが來れば死ぬ。災難が廻り來るときは廻り來るものぢや。人が何んど云たとして、氣まじ蚊と云たとして、心は掛けて居たとして、ソレデ災難が脱れる者ではない。なと死ぬのを助かる譯でもない。又さう云ふたとして死ぬものでもない。なけれはかう云たとして、災難が來るものでもない。と威はれ、此れは無法の者と云者で、相手よならぬ者ぢや。一体、此んな人間の間違つて居ますので、世の神様があるのを神さまがないと云ふが、間違いの頂上であります。神様があれば、ころ不思議があります。不思議と云ふの外でもありません。人の忌むべきとき、忌ます人の恐るべき時、恐れもせぬと、岐度其丈の災難があります。

だから能く神様を信心して昔から此れを思むべきことちや此れを恐るべきことちやと云ふてあること何んでも之を思み之を恐れるが宜いことであります何んも威張りをするもの及びぬことでありませ怖いこと怖いこととして謹むが宜うございませ彼の芝居町などよて猿のことをさると云へば直ぐは夜猿と云ひ直ぐは摺木のことを當木と云ひ摺鉢を當鉢と云ひ下女が硯箱は躰づいてエー、イタイ此の硯箱めがと口小言を云ふを主人が聞いて居て大きに怒り此りやお三硯箱ぢやないや當箱たぞと叱るなと決して笑ふべきことよあらざるなり豆腐の殻を月の始めの寶が入らぬとて之

を煎らずして月の末の寶が大入ぢやと縁氣を付けて之を煎るなと尤ものことでありませ又た御幣擔くと云ふこと西洋にもあり英雄豪傑でも擔ぎませ彼の世界の名を響かせたる世界第一の英雄豪傑と云ひる、獨逸の大宰相ビスマルクの金曜日を思んで如何なる急速の要事よても木曜日の正午十二時が鳴るや否や直ち書記をして手を止めしめたりしが不思議にも獨逸の老帝ウヰルヘルム一世の金曜日死なれ又た先帝フリドリヒ第三世も金曜日死なれませた「ビスマルク」の思むも譯あることでありませんか御幣擔くことが馬鹿氣て居ると云ひれませうかされば御幣擔ぎと云ふを

笑ふか神様の有難ものだから之を信心して氣は障つたことがあつたら能く謹慎して居るが大丈夫であります

と何やら神主の提燈持のやうな又お利口連のお先きのやうな變屈な議論を二十二番平毛太郎の八つ氣と成つて已やれさう云ふ馬鹿をぬか居るが一言の下云ひ伏せてやらんと待構へたる有様まで十六番が言終るか終らぬ一立一發言の許を得て

ナント、マア呆れ返つた論者でいありませんか今時アンナ議論を云ふ人がありませうか頑固とも變屈とも何んとも蚊とも名の付やうも云ひやうもない論者であります此の文明開化の世の中はアンナ馬

鹿氣た説を云ふ者の鎖の草履を穿て鐘と大鼓を叩き立て搜して見ても薬もしたくも有りなせぬと思つて居たふ今日今時此の同席中麗々しく説き出す人が飛びださうといやハヤ本當は驚き入つた次第で餘り吃驚して仕舞まして急な言はも出ぬ位であります十六番の支那の歴史は天變異地のこと、澤山書いてあると此れは知れたこと毛唐人の馬鹿が書いた本でありますからソナこと何程でも書いてありませう又十六番の日蝕月蝕のことをさも大仰に持ち出されまはたが此れは小學校へ行く小供でも能く知つて居ることでありませう何んと思つてソナ正を云ひ出まはたのや

ら本員より十六番の氣心が分りませんと分りませんと
送本氣の沙汰とい思われません大方上氣の氣味合
でもありませんか狂人のことへ外の考へられません
狐付きと云ふ者の本員の未だ見たことありませ
んが大方十六番のやうなことを云ふ者を狐付きと
でも云ふのでありませう本員の始め御幣擔きの笑
ふべきことよあらずと云ふ題を見て不思議な題
や今時此んなことを云ふ馬鹿者のあるまい麗々
しく此んな題を掲ぐるからまい何んでも奇妙な誤
迷説があるたらう併し如何なる誤迷説よもせよ題
が毛一間違つた題だから此奴一つ云ひ破つて遣ふ
と色々考へて置たこともありませんたが十六番のこ

とを聞いて餘り馬鹿氣て居て駁撃の仕様も模様も
ありませぬから本員の最早や何んとも論じますま
い他の諸君も一人として賛成のお方ありませんま
い依つて此處よ其屁羅棒たる事丈を申し置きます
是れより十六番と二十二番の彼是れ論じ合ひが互ひ
よ同じやうなことを決を取るよ至つて二十二番の
説よ起立者多きを以て遂よ二十二番の勝と定まつた
り最後の發論者の食足飲太郎と云ふ人なり
本員が此處よ掲げたる今日の討論題の昔の盆と正
月と申す題なり諸君の變手固を題を出す奴ちやど
思ひるゝならんが決して變手固でも妙痴奇林でも
何んでも蚊でもありません其所以譯合があります

不能く今日の世の中の人と昔の世の中の人
の心とを比べて御覧なさい如何であります昔の世
の中の人々の心ろのチヤントして極りが付いて居り
ますが今の世の中の人々の心ろのアヤフヤよして折
目がありません六ヶ敷く申さば昔の世の中の人
心の規則が正とうございまして今の世の中の人
心の規則が立つて居りません片方のチヤント志ま
りが付いて居りますが片方の其志まりが付いて居
りません之を魚に喩て申さば昔の世の中の人
心のやうは誠にお行儀が正とうござりますが今
の世の中の人々の心の鰻のやうはぬらくらとと海月
のやうはブヲくとして本當にお行儀がござりませ

ん又た昔の人の勤め方と今日の人の勤め方と何ら
が宜く勤めるかと引きくらべて見ますれば此れも
矢張り昔の人の勤め方がやうござります此れと申
すもつまりの前申した人の心は極りの付いてるの
と付いて居ないとの區別があるからでございます
其處で然らば昔の人だとして目の横は付いて居れば
鼻も堅く付いてをり其下は口が付いてるなり今の
人たとして同じこと目が堅く付いたり鼻が横は付い
たり口が顔の上の方へ付いてるやうな間違つたこ
とへありません昔の人が手の二本あれば今の人
手が二本あります昔の人足が二本あれば今の人
足も二本の足があります昔の人よアノソレナニが

付いて居りますれば矢張り今の人よもアノソレ、ナ
 ニが付いて居りまするか昔の人と今の人と見た處
 ハ違つた處がないのよ其心たてと爲ることが違つ
 て居るの如何云う譯柄でありますか何よ其理
 屈がなければならぬ筈であります即ち其理屈を
 本員が發明したたのであります如何よも其理屈
 ハ新發明のことでありますから今度之を願出して
 專賣特許を得て置うと思ひます誠よ大事な理屈で
 ありますれば容易よ人よ話すことハ實以て惜い譯
 でありますか今日ハ是れ同志の人々が寄り集つて
 互ひよ世の中のことなり學問上のことなり討論し
 合つて其眞理のあるところ其奥の隠をハ探ねん爲

めハ開きハ會なれハ本員も未だ誰よも話ハませぬ
 大事な理屈を持出したたのであります諸君其お
 積りで龜組のことハ聞き流しよして下されてハ
 困ります聞て仕舞つたらハ能く耳の底ハ栓を押し
 込んでお置き下されてお忘れのなきやうよねがひ
 ます(エヘン)其の大事な有りかたい理屈と申すのハ
 外のおとぞハありません昔の益と正月と申すのであ
 りますナント諸君ハ此れよハお氣が付れませなか
 つたでございませう此の昔の益と正月と申すこと
 ハ申々大事なことでありまして今日ハ此の大事
 な昔の益と正月と申すことかありませんよとあつ
 ても之を大事ハいたしません決して昔の益と正

月でのありませんサレバ昔の盆と正月が何處が大
 事なのたよいのだと申すならソレハ大事な大
 事なことがあります盆と正月と申すの一年の中
 て一番大事な時であります此の一番大事な時であ
 りますから正月が近きますと爺さんや婆さんの
 レお正月よなるんたから煤取をせねばならぬヤ
 餅搗をいたさねばならぬモー今日の大晦日よなつ
 九七五三繩を飾らねばならぬ重詰を拵へて置かぬ
 ばならぬ屠蘇をきて置かぬはいかん牛房を煮よ
 マメを煎れ煮豆をせよ數の子を漬けて置け孫の着
 物の出来ましたかソレ何處の掛けを拂つてやらね
 ばならぬお醫者さまの藥禮をしたか何處への歳暮

をしたかア、さうかうした中よ夜が明けて仕舞つ
 た先づ明けましてお日出度も祝の膳よ向ひ家内打
 ち寄つて雑煮の箸を取り屠蘇よ下戸も酒機嫌表へ
 の上下來た人が先づ新年の御慶お日出度舊冬の色
 々と御懇情下さりまして有りがたう存んどます今
 年も相替らすお心易く願ひますマアお通り下され
 ませお屠蘇をお一つ此の奴へお年玉のモ一、モ一お
 よしなされて下さりませればやうございませよ大
 きな凧とお美事を雙伍六へーコレハ出世雙伍六で
 ございますなコレ坊や叔父さんよお禮をお云ひで
 ねないかお歸りませるかナンヤトへ凧が引からまつ
 たどへヤレヤレ忙しないこと二日よの姉さんが當

り日た六日歳越ま歌骨牌の宿をするのた七日のた
 祝も濟んた十一日におこる粉をせねばならぬ十六
 日よのお鍋が藪入み來のた二十日正月よ何たか
 ら馳走をしやうなど延つよ御馳走をじて飲んた
 り喰つたりして樂しむなり又た盆が來ればお聖靈
 さまがお出でよなつたおのぎをせねばならぬ今日
 のお團子たお晝の冷素麵である南瓜と揚豆腐干瓢
 樵簞牛房のお煮染をじて上げねばならぬ水瓜も甘
 瓜も進せねばならぬエーお迎ひ申したばかりたの
 しましお立ちよならねばならぬお送り團子を拵へ
 て置きませうと飲むと喰ふとに目がまいる程忙の
 しく隣り近處の更なり親類や心易き人々と互ひ

よやつたり貰たりお禮に行くやら禮よ來られるや
 ら面白お可笑しく樂しんで遊ぶなり爺や婆の忙し
 ないよなんぞ樂しみなことがあるものかと云ふに
 互ひよ平日の無沙汰を濟し中違ひして居た家が
 中直りするとか皆々が家業を休んで笑つて觀樂の
 有様よ世間が充々すれは之を見る心れ樂しき忙し
 ない爺さん婆さんも些との間を見ては子供と同じ
 やりよなつて樂しんで居りますサア其樂しき如
 何てありませう天人が寄りたかつて笙や太鼓で樂
 んで居るより面白うございませう此の面白こと
 新年よ二度おあひません其二度おかない面白
 樂しみを樂しむから平日よは家業を勤める氣が盛

遊ふよ
あき
ね
ま
せん

んよありますさればこそ平日の一心は家業を勵み
 盆や正月が來ると何よもかも打ちやつて置ひて遊
 びます此の通り勤めること、遊ぶことよチヤント
 區別が立つてありますから人の心も極まりが付き
 規則も立ちのちくら遊んで居る者がありません之
 よ變つて今の世の中は日曜日ちやとて七日目々々
 よの商賣を休んで遊ぶ風が出来ましてソノ日曜だ
 ドンタラが來と東京では先づ淺草だの上野向島よ人
 が遊んで歩るきますから七日目々々よ遊んで歩い
 ての如何よ東京が廣いとして遊ぶ所もなくなれば又
 如何よ遊び好きでも遊び足勞て仕舞ます平日よ遊
 足勞れて仕舞ふ位ゆる盆や正月が來ても遊ぶこと

論者も
ラ
者
一
人
の
な
ら
ん

が面白うございません其上此節の盆をする者は頑
 固だとかお正月をずる者の田舎者だとか盆や正月
 を大事よじませんから一向盆や正月が面白うござ
 いません面白くないから皆んなが盆正月を樂しみ
 ません只々平日よメチヤノ遊んで仕舞ひ始終
 遊んで居るやうな勘定よなります始終遊んで居て
 の極まりがありません極まりがないから規則が立
 ちません規則がないからのらくらとして怠け者が
 多ほございます今日の世の中へのらくら者怠け者
 で充ちて居ります此な有様への迎ても日本へ立ち
 行きませぬ因つて此を濟ふよれ今日よ於て宜しく
 昔の盆と正月を置くこととを何り来す昔の盆と正

月とを置けり人心は極まり規則が付きまゝて人々
 家業を勵み國家富強になりまゝオント昔の益と正
 月ハ大事な者でハありませんか
 二十七番阿面十字之助ハ起ち上つて曰く
 二十番(食足)ハ昔の益と正月との説を述べられしが
 其言たる實ハ屁羅棒として著しも棒もかゝらぬ
 ことなれば本員ハ之を辨駁もいたしませぬ攻撃も
 いたしませぬ諸君も御同様であります此んな馬
 鹿氣た説ハ相手よなる屁羅棒であれまゝ因つて本
 員ハ捨て置きまゝ諸君も抛てお置きなされませ
 此の題ハ此れよて別ハ議論も出でねハ決を取るこ
 とは致せしよ雙方よ起立者同數なりしを以て引分け

といなりよける右よて今日の討論會ハ了りければ放
 言散士も家よ歸へり其傍聽筆記を篇して一部の書と
 なしぬ

天狗の討論大尾

版權登錄

明治二十一年七月十日出版

定價金十二錢

千葉縣平民

著作者

初芝 龜太郎

本郷駒込東片町六十五番地寄留

發行者

能勢 土岐太郎

日本橋區通三丁目九番地

版權所有

明治二十一年六月三十日印刷

印刷者

北澤 久次郎

京橋區中橋和泉町一番地

發賣所

多田屋 嘉左衛門

上總國東金町

全

多田屋 支店

日本橋區通三丁目九番地

